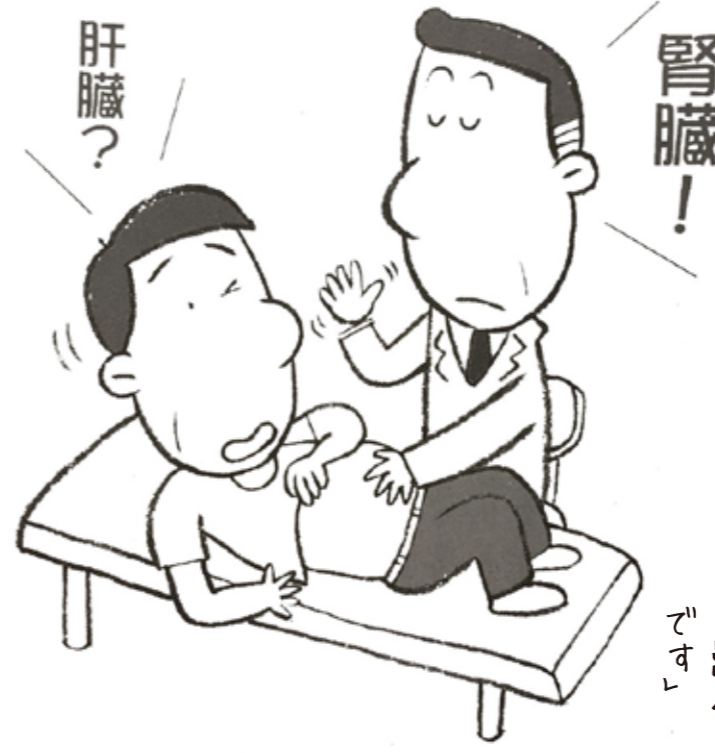


阿弥陀さまの処方箋

「無自覚性自己中心症候群」の私へ



菅原 昭生
(すがわら・あきお)
島根県太田市・西楽寺住職



ほんとうの私

あるお医者さんから聞かせていただいた話です。六十歳くらい歳の男性患者さんが顔をしかめて、お腹を押さえながら診察室に入って来ました。

患者「先生、ワシはどうも肝臓が悪いようです。すみませんが肝臓の薬を出してください・・・」
医師「え？まだ肝臓かどうかわからないでしょ。まあ、とにかくここに横になってお腹を診せてください。(患者のお腹を押さえながら) ニニはどうですか？ニニは・・・？」
患者「そ、そ・・・、そこが痛いんです」

医師「ほらほら、ニニは肝臓じゃありませんよ。腎臓がはれていますね。おそらく、この患者さんは、若い頃から毎晩酒を飲み続けてきた自分のことだから、腹が痛くなったのは肝臓の病気のせいだろう」と自分の知識で診立てたのでしよう。そんな患者さんが言う通りに肝臓の薬を出したとしても、腎臓の病気が治りません。

よる私のカルテにある病名を味わってみますと、「無自覚性自己中心症候群」「先天性不治癒型悪性傲慢な性立腹病」など、次から次に出て来ます。

そんな私に対して、阿弥陀さまの処方箋によって調えられた薬が「南無阿弥陀仏」の名号です。

その主成分は、私にはとてもできない修行や善根の功德です。ちよっと善い行いをしても相手からお礼がなければ腹を立てたり、修行を十年すると、三年の修行をした人に対して七年の差をいばってしまう「重病人の私のための薬です」。

その薬を服用する(念仏申す)とき、不治癒型の(治ることのない)病気を抱えたまま、いのちいっぱい自分の人生を引き受けて歩んでいくことができません。そして、この命が尽きたとき、すべての病気が解き放たれ、「死なないいのちを恵まれます」。

昔の先輩はこの南無阿弥陀仏のことを、飲むだけでよく効く丸薬にたとえて「六字丸」と言われました。一錠の新薬が出来上がるまでに、その研究・開発の為に膨大な時間と手間が費やされると聞きます。

南無阿弥陀仏の六字丸も、聖典のお言葉に引き当てて言うならば、阿弥陀さまの「五劫」「兆載永劫」という思いも及ばないほどの長い時間におたる「思惟」(研究)と「修行」(開発)によって仕上げられました。しかし、どれほどの薬の効能や成分を理解したとしても、それを飲まなければ病気が治りません。おなじように「南無とは・・・」「阿弥陀とは・・・」と、南無阿弥陀仏の説明で本が一冊書けたとしても、この私が迷いから離れることはありません。六字丸は、飲みやすい糖衣錠のように称えやすい言葉として処方されています。薬を飲むように、ナモアミダツツ、ナモアミダツツとお念仏申す中に、この私を心配し、「われにまかせよ。必ず救う」と、呼び続けてくださる仏さまの願いをいただくのです。



診たてるのは、きちんと医学を学び、確かな技術を身に付けた医師にお任せした方が良いでしょう。そして、医師から自分の病気に応じた薬を処方してもらって、病気を治すことが出来るのです。同じように「ほんとうの私」もまた、自分で診立てたのでは、分かりません。あるお寺の掲示板にあった「人間みんな裁判官。他人は有罪。自分は無罪」という言葉のように、自分の診立ては、どこまでも自分中心で、都合次第で変わる、いい加減なものです。ですから、仏さまの教えをお聴聞することは、「自分の物差し」で自分を省みる「反省」とは違います。間違いない仏さまの智慧によって診立てられた、自分では気づくことのできない「ほんとうの私」を知らされることではないでしょうか。

私のための六字願

親鸞聖人は、阿弥陀さまが診立ててくださった私の姿を「無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心多くひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」とお示しく下さいました。ちなみに、阿弥陀さまの診立てに

合同法要

春のお彼岸

3月19日

- 11時の部
- 14時の部
- 16時の部

参加の場合は、必ず事前に希望の参加時間と人数をお寺までお知らせください。

電話〇七三ー四二二ー〇四七三
お布施は不要です。お気軽に参加くださいませ。